
月と星屑のライル

菊代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月と星屑のライル

【Nコード】

N5791X

【作者名】

菊代

【あらすじ】

朽ち果てた神殿で肉親を失った少女・ライル。彼女を助けたのは宝石商のアティーヤだった。

アティーヤが求めるのは、夜空の満月の名を持つ奇跡の宝石。ライルは姉の遺志を継ぎ、その宝石にまつわるある物語を語ることを決める。それは異形の美女と臆病な青年の物語だった。

少女が物語を語り始める時、魔石を巡る物語は紡がれる

現実と物語。二つの世界が交錯する、アラビアン・ファンタジー。

序章

真昼の砂漠の中にあっても、その場所は静寂と薄暗がりだけが支配していた。

遠い昔に作られ、そして捨て去られた神殿。今となつては、時間が過ぎ去り朽ち果てるのを待つだけの場所。その中央に向かう細い一本道は、土の壁で囲まれており、行くほうと来たほうからのみ光が入ってくる。

闇からくる恐怖からだろうか。それとも、この先に待つものへの不安だろうか。少女は姉の服の端を掴んだ。

「こんなに古い神殿で、崩れたりしないのかな」
すると姉は、優しい声で諭すように言った。

「大丈夫よ、ライル。あの人が外で待つていてくれるもの。いざとなれば助けてくれるわ」

ライルには、たった二つしか歳の変わらない姉が、とても気丈に見えた。そのように見えるようになったのは、姉が結婚してからだった。

あの人、というのは姉の夫であることを、ライルはよく知っている。彼は砂漠の真ん中にあるこの古い神殿まで、二人の付き添いでやってきたのだ。三人はラクダに揺られて、街からここまでの長い道のりを来た。

彼らがそのような苦難を甘んじて受け入れてここまで来たのには、それだけの理由がある。

この先で、見なければいけないものがあるのだ。この暗い一本道のその先で。

「ライル。よく見なさい。そして胸に刻みつけるのです。我々物語り師が語るのは、単なる絵空事ではないということを」

そして二人は、神殿中央の広い場所に出た。
建物は元の形を保っていなかった。天井は一部崩れおち、灼熱の

日差しが差し込んでいる。かつては細密な装飾があったであろう壁は、砂漠の風にさらされ、ほとんど原型がなかった。ある場所にはがれ、ある場所はえぐれている。かつて天井や壁であったであろう破片が、床に散らばっていた。

ライルはあるものを見つけ、身を震え上がらせた。

静かに横たわっていたのは、一体のサソリの像。その像は顔だけが人間のそれのようで、足が普通のサソリよりも多く生えている。見るものに恐れを感じさせる像だった。

「異教徒の……偶像……」

ライルは思わず、姉の陰に隠れる。しかし、姉は物怖じ一つせず
に言う。

「その隣を、見てみなさい」

姉が指差す方向を、ライルはゆっくり見た。なにかとても崇高なものを飾るかのような立派な台座がそこにあった。しかし、肝心の飾られているものは見えない。そのものは、もうここには無いらしかった。

だが、かつてこの台座に据えられ、崇められていたものの名前を、ライルは知っている。

「バドル・アル・ドュジャー……」

そう呟いた時。まさにその名が呼び寄せたかのように。

災厄が具現する。

短い悲鳴が、通路の向こうより木霊した。それが姉の夫の悲鳴であることを、ライルはすぐに理解する。次に不穏な足音が反響して聞こえた。何者かが、賊が、近づいてくる。

神殿にはもう一つ出口があるようだったが、瓦礫で塞がれていた。逃げ道は無く、ただ足音が近づいてくるのを待つことしか出来ない。あまりの恐怖で体を凍りつかせるライルの手を、姉は強く握った。

そして現れたのは、二人の男だった。

二人ともいかにもならず者という風の破れた服を着ていた。顔に布を巻いているため表情は分からないが、目だけはギラギラと光つ

て見える。手には剣。その刃は赤黒い血で汚れていた。

神殿を荒らすために来た盗賊か。それともただの追いはぎか。それは分からなかった。分かるのは、賊達の邪悪な意思のみ。

ライルと姉を見た二人は、剣をこちらに向けた。そして一步一步、じわりじわりと間合いを詰める。

「ライル。あなたは逃げなさい」

姉はライルにしか聞こえない声で言った。

「でも、それじゃあ……」

男達は近づいてくる。ゆっくりと確実に。

そして間隔が狭まった時、一気に切りかかってきた。

同時に姉は、その凶刃からライルを逃がすように、彼女の背中を押す。

「走りなさい！ 後ろを見ないで！」

恐怖で頭がおかしくなりそうだったライルは、なにも考えずにそれに従い、走り始めた。

一心不乱にライルは走った。耳に届くのは、男達の怒号。そして姉の悲鳴。

そこでライルはやっと気付く。自分は今、姉を見捨てて逃げているのだと。

それでも彼女は走った。走ることしか出来なかった。

そのまま走り、一本道の通路をでたところで何かに躓いて転んだ。ライルは首をひねり、自分が躓いたものを見る。

そこに倒れていたのは、姉の夫だった。背中は一バツクリと裂け、皮膚の下肉と骨が見えている。身に纏っていた服は血で赤く染まり、もとの色が分からないくらいになっていた。苦痛に身悶えることすらしていない。既に彼が絶命しているのは明白だった。

「あ……」

訳が分からなくなったライルの口から、声にならない声が出る。少しして、自らの置かれた立場を理解したライルを襲ったのは、かつてないほどの絶望。

「うう……あ……」

絶望は体の中心から溢れ出て、喉を通って叫びとなる。

「いやああああああ!!」

その時だった。突如強烈な風が吹き、視界がぐらぐらと揺れた。いや、揺れているのは地面なのかもしれないとライルは思った。しかし耳を打つ風の音と響き渡る何かが崩れる音が頭を支配し、何が何なのだか分からなかった。

ただ、怒っているかのようだ、とライルは直感した。しかし、何が怒っているというのか。

……異教徒の神が？

彼女には、ただ身を伏せてすべてが過ぎ去るのを待つことしか出来なかった。

やがて、すべての音が止み、砂漠は静けさを取り戻す。

ライルは顔を上げる。

そこにあつたのは崩れてしまった神殿。入り口は塞がってしまった。ていた。

酷い有様だった。先程まで自分がいたところも崩れ、姉はその下敷きになってしまった。そう思わずにはいられないほどの。一人残されたライルは、呆然と佇むことしか出来なかった。

「そんな……姉様……」

深い悲しみは雫となって両目から溢れ、ライルの頬を伝う。

彼女の涙は一瞬地面にしみを作り、すぐに乾いて消えた。

第一夜 物語り師と月の魔石「1」

遙か彼方より吹いた風が、砂塵を巻き上げた。

ラクダに乗って砂漠を進んでいた青年は、白い服に付いた砂を払う。目に埃が入ったのか、ラクダが鳴き声をあげた。青年は手綱を握りなおし、再び前を見つめる。

青年の眼前には、岩と砂だけの不毛の地が続いていた。生き物の影はほとんど見えない。青年が向かうオアシス都市に着くまでは、もう少しこの風景が続く。

青年の旅は順調に進んでいた。このまま行けば日が沈むまでには街に着くだろう、と青年は空を見て日の高さを確かめる。

その時彼は、自分が進む先に何かが倒れているのに気が付いた。

なんだろう、と目を凝らす。それは小柄な人間に見えた。だが、なぜ荒野の真ん中に人が倒れているのだろう。

……妖怪のたぐいか？

そんなことを考えつつ青年はその者に近づいた。ラクダから降り、うつ伏せに倒れていたその者の肩を揺する。しかし返事はない。服の端から見える腕や掴んだ肩は細く、女のようなだった。

そのまま彼女を仰向けにさせる。倒れていた者は、若い娘だった。頭に被ったベールの端からは、黒髪がこぼれ出ている。顔には生気が無く、瞼も閉じたまま動かずにぐったりしていた。妖怪ではないようだった。

なぜこんな若い娘がこんな所で倒れているのかという疑問が脳裏を過ぎったが、すぐに今はそれどころではないと思い直す。ラクダにくくり付けてある麻袋から、皮で出来た水筒を取り出し栓をあける。水筒の中の水は、半分ほど残っていた。それを少女の頬にかけてやる。水筒の中の水が残り僅かになったところだった。

少女の睫毛が僅かに動いた。

娘はゆっくりと目を開く。青年は安堵しながら彼女の顔を覗き込

んだ。少女はまだ意識ははっきりしていないようだが、ぼんやりとこちらを見た。

「……飲めるか？」

水筒を唇に近づけて問うと、彼女は少しだけ首を縦に振る。水を少し口に流し込んでやると、少女はゆっくりとそれを飲み込んだ。少女は掠れた声で尋ねた。

「……あなたは」

「私の名前はアティーヤ。アティーヤ・ニツサファーだ」

力なくこちらを見ている少女の瞳には、不安の色があるようだった。だから彼女を安心させようと、アティーヤは優しく微笑んだ。

「安心しろ。私が君を無事に家まで送り届ける。この名に懸けて誓おう」

アティーヤは少女をラクダに乗せて、街に向かった。

少女は街に着く前に、再び意識を失った。

少女が再び目を覚ましたのは、翌日の朝だった。

目を覚ました少女はまず、自分が寝台の上に横たわっており毛布がかかけられていることに気が付く。少し開いた窓から差し込む朝の光がまぶしくて、目を細めた。

そうしていると、見知らぬ女が視界に入った。こちらを見て破顔した彼女は、明るい声をあげる。

「あら、起きたのね！ アティーヤさん！ あの子が起きましたよ！」

彼女に呼ばれてやってきた青年も、彼女を見て口元を緩める。

「気が付いて良かった。気分はどうだ？」

起きたばかりであるせいか、視界がまだぼやけていた。だが、青年の顔を見て、砂漠で倒れていたのを助けられたことを思い出す。

「貴方は……わたしを助けてくれた……」

「あの時のことを覚えていたんだな。改めて名乗ろう。私は宝石商のアティーヤだ」

商人という割には、こちらを見る青年の表情は逞しく見える。そういえば自分を助けた時、旅の仲間の姿は見えなかった。一人で砂漠を渡るような男は、それに似合った風格を持つらしい。腰には剣を携えていた。

年齢は二十過ぎくらいだろうか。成人した男は髭を生やしていることが多かったが、アティーヤの顔にはそれがなかった。しかし、物腰は落ち着いており、一人前の商人の顔をしている。ターバンを巻き、動きやすそうな服を纏っていた。

「わたし……」

少女がゆっくり身を起こすと、アティーヤはそれを制止するような動作をした。

「無理にしゃべらなくていい。今はゆっくり休め。君のことはあとでゆっくり聞かせてくれ」

そうしていると、先程の女が器をもってやってきた。

「お体はどうかしら？ 飲める？」

女の顔には子供を慈しむ母のような微笑みが浮かんでいる。彼女の年齢を考えれば、本当に子供がいたとしてもまったく不思議ではなかったが。

差し出された器には、ヤギの乳が入っていた。

それを見て少女は、自分がひどく空腹であることに気が付く。空腹を通り越して、体全体を倦怠感が支配していた。視界がぼやけているのも、そのせいなのかもしれない。

力の籠らない手でそれを受け取る。そして器に顔を寄せるようにしながら、乳を口の中に流し込んだ。

瞬く間に、渇いた喉にヤギの乳が染み込んでいった。体の隅々まで力が満たされていくように感じる。生きた心地が、した。

「……ありがとう」

器を空にしてしまった少女は、女にそういった。女はやはり微笑

んで、「どういたしまして」と言った。

「彼女はこの隊商宿の女将さんだ。寝ている君の世話をしてくれた」
礼を言おうとすると、口を開く前に彼女は、「お礼なんていいのよ」と笑った。

「じゃあ、ここは……」

「商都・フェルカンド。砂漠の真ん中にある、オアシス都市だ」

そう言うと、アティーヤは窓を全開にする。

眼前にはフェルカンドの街並みが広がり、その向こうには砂漠が見えた。

フェルカンドは帝国でも有数の交易都市だ。砂漠の真ん中に位置するこの場所では、古今東西のあらゆる品物が取引される。古くは砂漠に行く隊商が休息をとるためだけの小さな街だったが、現在ではこの辺り一帯では一番大きな都市となっている。

そんな都市の市場ともなれば、その規模は相当なものだ。売られているものごとに大まかに区画が分かれているのだが、その分類も実に多様である。

市は定刻まで開かれない。それでは市場も静かなものだ。しかし、市が開かれると同時にあたりは一気に騒がしくなる。売られ買われ、値切って値切られ。多くの市場に行ったことがあるアティーヤだったが、ここまで活気のある市場もなかなかお目にかかれない。熱くなりやすいのがこの街の人々の気質なのかもしれない、と彼は考えている。なんにせよ、景気がいいのは良いことだ。

彼がやってきたのは、女向けの服飾品を扱う店が立ち並ぶ通りだ。宝石を扱う商店の通りは別に、一本隣りにある。アティーヤがやってきたのは、知人に会うためだった。

アティーヤが行き着いたのは、一軒の店。店頭には、色とりどりの服がかけられていた。貧しい者が買うような古着はなかったが、

中流階級の子供が着る服から上流階級の婦人のスカートまで、様々な服がずらりと並んでいる。

その店先に、恰幅のいい男が座っている。がっちりとした体型だが、目がくりくりしていてどこか茶目っ気のあるこの男は、この店の主人だ。元はアティーヤの父と仲が良かった彼は、その跡を継いだアティーヤとも親交がある。服屋の主人は、こちらを見ると口の端を吊り上げた。

「おや、アティーヤ。女物の服を買いに来たのか？ さては、女でも出来たのかい？」

彼は軽口半分にそう言った。女、という言葉に砂漠で出会ったあの少女のことを思い出す。彼女のことは宿の女将に任せてきており、今は宿で寝ているはずだ。しかし、彼女のために服を買いにきた訳ではないし、彼女とは主人が言うような関係ではない。

「まさか。お久しぶりです、親父さん。どうですか商売のほうは」

「駄目だ駄目だ！ ムアイカドの坊ちゃんは、外から来た商人ばかり優遇しやがる」

ムアイカドという人物は、フェルカンドを支配する七つある氏族の一つの当主だったと記憶している。確か年齢はアティーヤよりも少し上だったので、もう坊ちゃんと言われるような歳ではない。皮肉のつもりで言ったようだ。

しかし、店の様子を見る限り、生活を窮迫ほどではないのだろう。

「アティーヤのほうはどうだ？ 確か西のほうに行っていたとか」

「西は戦一色でしたよ」

「だが、別に商売には困らないだろう？」

彼の言うとおりだった。戦争で国が荒廃し民衆が貧しい生活を強いられようとも、あるところには金がある。宝石のような高価なものも、買い手はいるのだ。むしろ、宝石には不思議な力あると信じられている地域もあり、そういうところでは、戦争のように社会全体が不安になると、宝石を買い求める者も増えるのだ。

「しかし、旅をするには物騒です」

「お前は一人で旅をしていたんだっとな」

「はい。宝石商は大きな荷物を運びませんから。ラクダー一匹いれば、事足ります」

「しかし、わざわざ一人で旅することはなかるう。隊商に加わるなり何なりすればいい」

砂漠を渡るときは、主人が言ったように、仲間を作るのが普通だ。荒地には盗賊もいるし、獰猛な肉食獣も潜んでいる。しかしアティーヤは、仲間を作ることにはしなかった。

「……旅の連れがいたからといって、安全とは限らないでしょう。身内や旧知の仲ならともかく、異郷の土地で信頼できる者を探すのは難しい」

主人は何か言いたそうな顔をしていたが、何も言わなかった。

「それより宝石の相場は？」

アティーヤがそう切り出したので、そこからお互いの商売に有益な情報の交換が始まった。アティーヤは、西で流行している服の話をし、店の主人はこの街の宝石商達について話したりした。話の種が一通り尽きたところで、アティーヤは聞こうとしていたことがあったのを思い出す。

「ああ、そうだ。大事なことを聞き忘れていました」

その問いをしてくることは、主人も予想していた。

「バドル・アル・ドウジャーの話は、聞かないですか？」

主人は僅かに顔を曇らせた。

その日一日は、街の商人達と話をしたり、市場の様子を見ただけで終わった。本当なら出来るだけ早く品物を買付け、次の街に向かうべきだが、今はあの少女の事もある。アティーヤは、誰に対しても心優しいというわけではなかったが、一度約束したことに關しては、最後まで守る性分だった。砂漠で、無事に送り届けると彼女

に言った。約束した以上それを破るつもりはなかった。

そういう訳で、アティーヤはまだ日が高いうちに宿に戻った。すると宿屋の女将は待ちわびたような顔で言った。

「おかえりなさい。アティーヤさん、あの娘、起きたわよ。貴方に言いたいことがあるんですって」

きっと元気を取り戻したのだろう。そう期待して、彼女の部屋に向かう。

例の少女は客室ではなく、元は使用人部屋で今は使われていなかった部屋にいる。隊商宿を利用するのは男ばかりで、その中に若い娘が滞在するのも注目されると思ったのだ。少々手狭ではあったが、宿屋の女将に面倒をみてもらうのにも、そのほうが都合がよかった。二階建ての宿のうち、彼女のいる部屋は一階の奥にある。部屋の前まで来て、女将が戸を叩いた。

少しして、扉がゆっくり開いた。部屋の中から、少女が顔を覗かせる。

アティーヤは改めて彼女を見た。まるで親を失って道端で震えている子猫のようだ、と思った。体つきは小柄で、二つの黒い大きな瞳は、恐怖と警戒の籠った様子でこちらを見ている。

「どうぞ」

か細い声でそう言うと、彼女は戸を開いて部屋に招き入れた。

部屋の中で少女とアティーヤは、女将を挟むようにして向かい合った。

「あの、助けてくださってありがとうございました……」

そう言う彼女の声は今にも消えてしまいそうなくらい小さい。一瞬目が合ったが、すぐに下を向いてしまった。

アティーヤは思わず不安になる。自分が何かしただろうか。年頃の娘が男を警戒するのは仕方ないとしても、自分は彼女の命の恩人なのだ。もう少し信頼してくれてもいい気がした。

女将の顔を見ると、困ったようにこちらを見ている。視線を落とすと、少女の手が女将の服を掴んでいた。女将には心を許している

らしい。あまりいい気はしなかったが、出来るだけそれを隠して、優しい声で少女に尋ねた。

「君、名前は？ 教えてくれるか？」

「……ライル、と言います」

「体のほうは大丈夫か」

ライルは無言で頷いただけで、それ以上は何も言わない。

「……そうだ。君に渡したいものがあつた」

気まずい沈黙を何とかしようと、アティーヤは懷から包みを取り出した。

中にあるのは胡桃に砂糖をまぶした甘い菓子だ。アティーヤは甘いものが嫌いな女性に会った事がない。きっとライルも気に入るだろうと、買ってきたのだ。

「食欲はあるか？ 食べないことには、良くなるものも良くならな
いからな」

アティーヤが差し出すと、ライルは両手でそれを受け取る。しかし、黙って頭を下げただけで、一つも言葉を発しなかった。

「気を悪くしないでくださいね、アティーヤさん。貴方のことを怖がっているとか、そんなのではないのよ」

ライルの部屋を出て、少し離れたところで女将はそう彼女を庇った。

「まだ体の調子が悪かったんでしょうか」

「いいえ。きつと彼女を苦しめているのは体ではなく心の痛みよ」「心？」

アティーヤが言葉を繰り返すと、女将は静かに頷く。

「私も少し話を聞いたただだから詳しくは分からないのだけれど……彼女、砂漠で家族を失ったみたいなのよ。盗賊に殺されて」

彼女が自分を警戒する理由が分かった気がした。

きつと自分を見ると思い出してしまうのだろう。自分の家族を殺した、男達のことを。

砂漠で彼女を見つけたとき、ライルは一人だった。盗賊に家族を殺され、たった一人で砂漠にいたのだ。どちらに行けばよいのかも分からず、街を探してさ迷っていたのだろう。もしかしたら、このまま自分も死んでしまうのでは　そんな思いで。

その恐怖は、あの見るからにか弱げな少女が背負うには重すぎるに違いない。

肉親を失う悲しみは、アティーヤにも良く分かった。救済したい、とまでは思わない。ただ、ほんの少しでも彼女の支えになればたら。

「……もう少し、彼女と話することは出来ないでしょうか」
腰に提げていた剣は、置いていくことにした。

ただでさえ警戒されているのだから、一人で彼女の部屋を訪れても不安を煽るだけだろう。そう思って、宿屋の女将に付いて来てもらうことにした。

案の上ライルはアティーヤを、歓迎はしなかった。しかし自分が命拾いし、この宿で滞在出来るのは、アティーヤのお陰だというのは理解しているのだろう。露骨に拒絶することもしなかった。

部屋は広くはなく、室内にはライルが横たわっていた寝台と小さな机と椅子が二つしかない。机の上には、菓子の包みが手付かずのまま残っていた。

ライルは寝台に、他の二人は椅子に腰掛けた。

「……良かったら、君の話が聞きたいんだが……」

そういうとライルは、表情を曇らせた。アティーヤは慌てて付け加える。

「……悪い、心の整理が出来たときでいいから、話してくれ」

ライルの表情が少し元に戻ったので、アティーヤは内心安堵した。

「そう言えば、私自身の身の上についてはあまり話していなかったな。君の話を聞く前に、自分について話するのが筋というものだろう。聞いてくれるか？」

「……はい」

そう答えた少女の声色は、先程までよりも力が籠っているように思った。少しはアティーヤに興味を持っているらしい。

「朝にも言ったかもしれないが、私は主に宝石を取り扱う商人だ。宝石だけじゃなく、装飾品全般を取り扱っているな。宝石商がどういう仕事か分かるか？」

ライルが首を傾けたので、出来るだけ簡単な説明を始める。

「宝石というのは、地域によって価値が違う。石がたくさん採れるような地域では、貧しい農民だってお守りに宝石を持っているんだ。逆に、ある地域では流行や迷信なんかによって、他では価値の無い石もとんでもない高値で取引されたりする。物が豊富などころから、物が無いところへ物資を運ぶ。需要と供給を繋げる。宝石だけに限った話じゃなく、それが商いの基本だよ」

ライルは真剣な眼差しでこちらを見ている。自分の話に興味を持ってもらえることが嬉しくなったアティーヤは、気を良くしてさらに続けた。

「そういう商売をしているもんだから、いろんな所に行ったよ。北の少数民族の集落から、南の海の方こうにある宝石が山ほど採れる島……東では見たことのないような生き物の伝説を聞いたし、西では異教徒との戦争を目の当たりにしたよ」

「どうして？」

初めてライルが自分から口を開いた。

「……どうして、と言うと？」

不意の言葉に困惑しながら、アティーヤは問い返した。

「どうしてそんなにいろんなところに行って商売をするんですか。いろんな所に行くってそれだけ大変なことだと思います……それなのに、どうして」

ライルの指摘はもつともだった。今まで行ったことのない道を通るには、通ったことがある道を通る以上に様々な危険が伴う。何よりも大変なのが、知人もいない見知らぬ土地で商いをする事だ。勝手も違えば、言葉すら通じない場合もある。

「それは……」

アティーヤは口ごもる。もちろん理由はあったが、簡単に言うのは憚られた。

しかし、ライルの二つの大きな瞳は、こちらを見据えて彼を離そうとしない。まるで、自分の胸の内を見透かしているかのよう。

「……探しているものがあるんだ」

もう、何も話さない訳にはいかなかった。

「それは……」

「最高級の宝石だよ。普段私達宝石商が扱っているものが、ただの石ころみたいに見えてしまうような奴だ。大きさはもちろん、その輝きも、超一級。夜空の満月が地に姿を現したかのような、宝石の名前は――」

「バドル・アル・ドウジャー……」

アティーヤが言おうとした名を、ライルは言った。

驚愕に満ちた表情で、アティーヤはライルの顔を見た。

「知っているのか？」

ライルの表情に、もはや不安や警戒の色はなかった。物怖じ一つせず、彼女は言葉を紡ぐ。

「『月の魔石』『地上の満月』『神の涙』……古より様々な名前と呼ばれてきた、不思議な力を持つ宝石。愚者に災いを、賢者に恵みを与えると云われる伝説の輝石」

ライルが言ったのは、まさにアティーヤが話そうとしていたそれだ。はやる気持ちを抑えながら、アティーヤは慎重に尋ねる。

「何でそれを知っているんだ？ 誰かから聞いたのか？」

「……わたしの姉は物語り師で、バドル・アル・ドウジャーにまつわるお話を集めて、語ってたんです」

「その姉君は、今……」

そう言つと、ライルの表情に陰が差した。

アティーヤはすぐに、彼女が砂漠で肉親を失つたという話を思い出す。慌てて言い直した。

「いや……君はそのお話を、知っているのかい？」

「ひとつだけ。ひとつだけなら知ってます」

「じゃあそれを聞かせてくれないか？」

え……、と小さく言葉を漏らし、彼女は当惑した顔になった。

「物語り師の妹である君なら、その物語も語ることができるんじゃないか？」

「でも……わたしは……」

ライルは自信がなさそうにそう言う。しかし、アティーヤはせっかく見つけた探し物の手がかりを手放すつもりはなかった。

「頼む。ようやく見つけた手がかりなんだ！ 私はどうしても……どうしても、バドル・アル・ドュジャーを手にいれなくてはならないんだ」

命の恩人にそう頼まれては、ライルも首を横には振れない。しかし、ひとつだけ条件を出した。

「日が沈んでからでもいいですか」

その一言に、今まで黙って話を聞いていた宿屋の女将は立ち上がった。

「だったら晩御飯にしましょう」

女将の愛想の良い笑顔が、二人に向けられていた。

第一夜 物語り師と月の魔石「2」

西の地平に日は沈み、暗黒が街を、そして大地を支配する。昼間はあれだけ賑わっていた市場も、見違えるほど静かだ。都市と砂漠を繋ぐ門は堅く閉められ、フェルカンドはゆつくりと眠りにつく。月明かりだけが、暗闇の世界をほのかに照らした。

夕食を終えた、アティーヤは再びライルの部屋までやってきた。

部屋にはアティーヤとライル以外に、女将とその娘、女将の妹もいた。皆、ライルが語るお話を聞きに集ったのだ。

物語り師の語りは、女子供にとって数少ない娯楽の一つだ。特に砂漠では楽しみも少ない。

アティーヤも幼い頃は、昔話をたくさん知っている叔母の話聞くことを楽しみにしていた。成長するに従いそういう場からも遠ざかることになったので、宿屋の幼い娘が期待に目を輝かせているのを見ると、懐かしい気持ちになる。

アティーヤは、娘とは違う期待を胸に抱いていた。

彼はずっとバドル・アル・ドュジャーを求めて旅をして来た。そして行く先々で話を聞いて回ったりしていたが、有力な手がかりは見つけることが出来なかった。しかし、話を聞いてきたといつてもその相手は仕事上の繋がりをもった商人が主。まさか物語り師がその手がかりを持っているなどとは考えていなかったのだ。だから、ライルがその宝石の名を口にしたとき、アティーヤの心臓は高鳴った。それは彼女にとって、不意に舞い込んだ幸運だった。彼女の物語が、バドル・アル・ドュジャーへと導く光となることを期待して、ライルが口を開くのを待つ。

「まず、お話を始める前に聞いてもいいですか」

ライルは部屋に集まった者を見渡し、そう言った。そしてアティーヤと視線を重ね、真剣な声色で問う。

「アティーヤさんは、どうしてバドル・アル・ドュジャーを探して

るんですか？」

アティーヤは、直ちに答えることは出来なかった。間を置いて、答える。

「……私の父も宝石商で、バドル・アル・ドュジャーを探していたんだ。父はもうこの世にいない。私は父の跡を継いで宝石商になった。その時に私は仕事だけでなく、父の遺志も継いだ。だから、なんとかしてその宝石を見つけ出したいのだ。それが、宝石商としての夢でもあるんだ」

嘘ではなかった。実のところは、本当の事をすべて包み隠さず話した訳では無かったが。

「……なぜそんなことを聞くんだった？」

「バドル・アル・ドュジャーはただの珍しい鉱物ではありません。伝説の宝玉です。賢者には恵みを与えますが、愚者には災いをもたらします。よこしまな気持ちや間違った心で近づけば、厄災が降りかかります」

近づくと言っても、ただ物語を聞くだけなのに　そう思ったがライルの言葉には、有無を言わせぬ力があつた。アティーヤは口を噤み、物語が始まるのを待つ。

「物語を始める前に、この物語をわたしに語って聞かせてくれた姉の話を少しさせてください。姉は優れた物語り師でした。物語り師と説教師、違いはなにか分かりますか？」

アティーヤは首を振った。

説教師というのは、街角や礼拝所の前などにいて人々に話を聞かせる者たちのことだ。語ることが仕事であることが物語り師と共通しているのは分かるが、違いはと聞かれると答えられない。

「説教師は聖典に書かれた言葉や古人の教訓などを、物語を通じて人々に伝えるために語ります。物語り師はそんな崇高な目的のためには語りません。　ただ、生きた証を刻み付けるために、語ります」

「物語の登場人物が生きた証を、か？」

「登場人物、そして語り部自身が、です」

ライルの双眸はまっすぐこちらに向けられている。

「身内にこんなことを言うものではないのかもしれませんが　間違ったなく姉は物語り師として天才でした。一つの言葉で聞き手を物語の世界へと誘い、物語を胸に刻み込む……わたしはそんな姉の元で育ってきました。姉は様々なお話を知っていました。特にバドル・アル・ドゥジャーにまつわる物語を集めていました。この宝石にまつわるお話は、星の数ほどあると聞いています。しかし、姉もその内のいくつか知りませんでした。わたしが語ることができるのは、その内でもたった一つ。……姉ほど上手くは語れませんが、聞いてくれますか？」

一同が頷く。ライルはそれを見て、再び口を開く前に瞼を閉じた。胸元で拳を握り締め、深呼吸をする。自分を落ち着かせているのかもしれないし、姉に想いを馳せているのかもしれない。

そして、唇を開く。闇の中、両眼が開く。

「今宵語りますは、とある青年と美しき異形の娘の物語でございます」

少女が発したたった一言。その一言が、宵の空気を震わせ、この小さな薄暗い部屋を支配する。

その声から、瞳の輝きから、誰が昼間の不安で震える少女を想像するだろうか。そこに少女はいない。一人の物語り師がいた。すべての言葉が、いや、言葉だけでなく些細な動作や息遣いのすべてが、聞き手を惹きつける。

「物語の主役である青年は、砂漠を歩いておりました。たった一人家族と生き別れて……」

ライルは締め切られた窓のほうを見た。その向こうに果てしなく続く広い乾いた大地に、想いを寄せるように。

「行くべき方向も分からず、青年は足を進めます。青年にのしかかるのは、不安、恐れ、そして絶望」

きつと今、ライルの瞳の奥に映っているのは砂漠を彷徨う青年

そして自分自身だ。

ライルは語る。青年が、そして自分が生きた証を刻みつけるために。

「ああ、どうして自分だけが生き残ってしまったのか。そんな思いが青年の頭の中を駆け巡ります。なぜ、よりによって自分が。もつと生き残るべきものがいたはずなのに……そんな思いで青年は大地を踏みしめるのでした」

薄暗い部屋の中を乾いた風が吹き抜け、物語の始まりを告げた。

*

果てしなく続く乾いた大地を、一人の青年が歩いておりました。かの者の名はファジユル。日に焼けた褐色の肌に黒い髪、白い衣を纏った若人でございます。彼は将来立派な商人になるべく父のそばで商いを学ぶ、若い商人でございました。ファジユルの父はあまたの駱駝を引き連れて砂漠を渡り、あちらの街で品物を買付けこちらの街でそれ売る大商人でございます。

しかし彼は今、馬にも乗らずお供も連れずに一人で地を踏みしめておりました。白く輝く太陽は、じりじりとファジユルの力を奪います。ですが、彼には喉を癒すための一滴の水すらありません。

裕福な商人の息子である彼が、なぜこのような苦難を背負うことになったのかと申しますと、それは一昨日の晩、彼と彼の父親の身に起こったことが理由でございます。ファジユルと彼の父は部下達とともに、品物を駱駝に乗せて長い隊商を作り、荒野を進んでおりました。すると、砂埃が舞い上がったかと思えますと、そこにベールで顔を覆った野盗の団が現れました。粗暴な野盗どもは恐ろしい剛力で、人や駱駝を斬りたおしていきました。ファジユルの父親は勇敢に最後まで戦いましたが、ついには野盗の凶刃に倒れてしまいました。ファジユルは命からがら逃げることができましたが、彼に残されたものはもう何もありません。青年にできるのはおぼろげ

な記憶だけを頼りに街を目指すことだけです。しかし気力も体力もともに極限にまで達しようとしておりました。

一人歩いていると、思い出すのは父のことです。母のいない彼は、いつも父の背中を追って生きてきました。父は商才があり、それでいて正々堂々としており、そして最期まで勇敢でした。

父のようになりたい。それがファジユルの願いでした。しかしそれは叶わない願いであるとも思っていました。

ファジユルは、自分はなんて臆病なんだろう、と心の中で嘆き悲しみました。今だって、青年の心は恐怖で押しつぶされそうなのです。

「……嗚呼、父さん。僕は父さんのようにはなれません」

しかし今となってはその父もいません。財産も肉親も失ってしまったのです。足は鉛のように重く、一歩進むごとに疲労が積み重なっていきます。それでも街は今だに姿を現しません。

ファジユルが己の宿命に絶望し、死を覚悟した時です。

荒地の彼方に、うつすらと街の影が見えたのです。

街に足を踏み入れてすぐに、ファジユルの喜びは悲嘆へと変わりました。というのもその街には、人どころか鼠の子一匹姿がなかったのです。どうやら住人達は遠い昔に街を捨ててしまったようです。人のいない街は不気味なほど音がなく、土でできた建物だけが静かに並んでおります。風の音だけがファジユルの耳に届きました。

「これも神の思し召しなんだろうか……」

ふと、視線の端で何かが動きました。そこにいたのは灰色のベールを被った娘。娘もまたファジユルに気づきます。しかし彼女は逃げるように駆け出しました。

「待って！ お待ちください！」

ファジユルは慌てて娘を追いました。娘は人無き街の路地裏を走

つていきます。しかし、高い壁に突き当たり、ついには行き場を失いました。娘はファジュールと相對することになります。

その時、一陣の風が吹き、かの娘からベールを奪いました。乙女の顔があらわになります。その風貌にファジュールは息を呑みました。といいますのも、娘の肌は乳のように白く、この世の人のものではないかのようなのです。柳の枝が風になびいているかのように揺れる髪も、まじりけのない白でございました。そして体つきはしなやかで、涼しげな目をしております。ファジュールは今日まで、これほど異様で、しかしながらも美しい風体の乙女をみたことはありません。その美しさは、人ならざる者の美しさでありましたので、ファジュールは思わず問いました。

「あなたは人の子ですか。それとも妖魔の類でしょうか」

「あなたはどうかのですか」

美しき乙女は問い返しました。その声はあたかも鈴の音のようでした。

「わたくしは人の子……商人ディヤープの息子で名はファジュールと申します」

それを聞くと娘はファジュールに歩み寄り、丁寧に頭を下げました。「ファジュール様、とおっしゃいますのね。わたし達の街にようこそいらっしやいました。心より歓迎いたします」

白い髪の娘は自らをイマルと名乗りました。

イマルはファジュールを自らの家に招きいれました。かの娘の家に向かうまでの間も、また彼女の家の内でもやはり人の姿は見えませんが、ファジュールは一抹の不安を抱きましたが、イマルが差し出した水の入った器を見た瞬間、それも吹き飛びます。

ファジュールは、久しぶりに飲み物を口にできる喜びに涙すら零しそうになりました。そうしていると次にイマルは、ご馳走の盛られた

皿を持ってきます。砂漠の真ん中で豪華な食事にありつけると思っ
てはいなかったので、ファジユルは感激してしまい、「嗚呼、偉大
なる神はやっぱ僕を見捨てなかったんだ」と呟きそれを口にしま
した。それらの食事の中には美味でないものは一つとしてなく、フ
アジユルは一口食べるごとに神への感謝の言葉を繰り返したのでし
た。ファジユルが勧めると、イマルもご馳走を食べ始めました。若
く美しい娘との宴ともなりますと、ファジユルの喜びはいっそう高
まります。

そうしているうちに太陽は砂漠の彼方に沈み、夜が訪れました。す
ると今度はイルマが運んできたのは、酒でした。

「娘さん、わざわざ用意してくれたのは嬉しいけど、僕は神に誓っ
て飲酒はしないと決めているのですよ。お召し上がりになるのでし
たら、あなたお一人どうぞ」

その言葉に娘は悲しそうにまなこを沈ませます。

「あなた様はわたしに一人で酒を飲めとおっしゃるのですか？ わ
たしはあなたと出会えた今日という日を、杯を交わして祝いたいの
です」

それでもファジユルが首を縦に振らないと、イマルはますます悲
しそうにします。

「後生ですから、わたしと一緒にお酒を飲んでください。ほんの一
口でも構いませんから」

なにしろ相手は見たこともないくらいに美しい娘ですから、ファ
ジユルはつい杯を受け取ってしまいました。ほんの一口だけでやめ
にしよう、と思って飲み始めたのですが、その酒はあまりにも美味
しく、またイマルが次から次へと酒を注ぐのですから、ついいた
くさん飲んでしまいました。

さて、酒を飲んで、腹が膨れると、今度は瞼が重くなるものでご
ざいます。

「過酷な旅路でしたから、さぞお疲れのことでしょう。寝
床に案内しますわ」

そう言うイマルに付き従い、ファジユルはおぼつかない足取りで寝室までついていきました。寝室に着くと、疲労感の頂点に達し、ファジユルはそのまま寝床に寝転がりました。

ファジユルはすっかり上機嫌になっていました。このときばかりは父のことも忘れ、イマルに問いました。

「娘さん、あなたのお陰で今夜は今までにないくらい安らかな眠りにつけそうです。ところであなたのお部屋はどこなのでしょうか」

ファジユルの問いに、イマルは口を押さえながら笑いました。

「何をおっしゃっているのですか」

そうして、ファジユルに顔を寄せます。青年の耳に、娘の甘い吐息がかかりました。

「ここがわたしの寝室でございます」

次にファジユルが目を覚めたのは、まだ夜が明ける前でした。そしてイマルの姿は見えず、辺りは物音一つございません。「どこにいつてしまったんだろうか。朝餉の支度をするにしても、早すぎるんじゃないだろうか」

もう一度目を閉じるも、イマルのことが気になって寝つけません。そこでファジユルは、部屋の外に娘を探しに行くことにしました。しかし、部屋を出るも、屋内には人の気配がありません。

仕方がないので娘は家の外で彼女を探すことにしました。外に出てファジユルは、まず空を見上げました。黒い夜空には、不気味なほどに赤い満月浮かんでおります。それを見ていると、イマルの姿が見えないことがますます不安になってしまい、足早で娘を探します。月光で照らされた誰もいない街は、昼間に見たときよりも、もつと気味が悪く思えました。

ファジユルの不安でたまらなくなり、元来た道に戻ろうかと考え始めた頃、彼の目が流れるような白髪を捉えました。夜風になびいた、

かの娘の頭髮でございます。

イマルはこちらに気がつかず、大きな神殿のような建物に吸い込まれるように消えていきました。慌てて、ファジユルもそれを追います。神殿の中は月の光が届かず暗黒に包まれていましたが、細い一本道だったので手探りで進むことができました。

しばらく進むと、天井が高く、広い部屋に出ました。天井に隙間があるようで、そこから月明かりが差しこんでおります。娘の姿は見えません。ファジユルが来たほうとは逆側にもう一つ出入り口があるようでした。

辺りが見えることに安堵したのもつかの間、ファジユルは自分の目に映ったものに背筋を凍らせました。そこにあったのは、一粒の宝石です。装飾が施された高い台座に据えられたその宝玉は、人の頭ほどの大きさがあり、ファジユルはこれほどまでの大きさの宝石を今まで見たことがありません。月の光を反射し妖しく輝くそれは、今宵の不気味な月が空より零れ落ちたかのようにも見えました。その光は美しさというよりは邪悪さを感じさせます。さらにおぞましいことに、その石を守護するように二体の巨大なそりの像が対をなすかのように立っております。顔の部分のみが人間のものと同じであるその像は、恐ろしい形相でファジユルのほうを見下ろしております。

邪悪なる宝石。おぞましい像。得もいわれぬ力を感じ、ファジユルは思わず後ずさりしました。悲鳴が口から零れそうになりましたが、手で口を押さえてなんとか堪えました。そして小さく呟きます。

「神に対してなんて冒瀆を！」

この街の者がかつてこの宝玉と偶像を信仰の対象としていたことを悟ったのです。あるいは未だ姿を見せないだけでこの街には人がおり、これらを崇めているのかもしれないとも思いました。そして、自分はそうとも知らずにあの娘とともに一夜を過ごしたことを思い出すと、吐き気を催しました。

その時、知らない男の声が夜のしじまを引き裂きました。

「見つけたぞ！ 化け物！」

ファジユルは声のしたほう、さつき来たほうとは逆の出口を、足音を立てないようにしながら目指します。こちら一本道で外へと続いています。ファジユルは身を隠しながら様子を窺います。

まず目に飛び込んだのはイマルの後ろ姿。そして、髭を生やした壮年の男でございます。男のほうは武人のようで、その面は闇の中でも分かるほど怒りで赤く染まっております。男は手に持った剣の鞘を払い、イマルのほうに向けました。ファジユルは息を殺して様子を見守ります。

「我が弟の仇！」

男はそう叫ぶと剣を振り上げ、迫りました。刃が月光を受けて煌きます。ファジユルはイマルが八つ裂きにされるところを想像しました。しかし、イマルは軽やかな足取りでそれを避けます。そして

そして飛び跳ね、風に吹かれて舞い上がる羽根のように体を浮かせます。その身のこなし、まさに人あらざるものの動きでございます！ そうしてそのまま落下し、なんと男の首筋に噛みついたのです！

忌まわしい光景でした。空に浮かぶ赤い月。ほとばしる赤い血潮。そして娘の瞳は火のように赤々と輝いております。静寂の中、娘が血を啜る音だけが聞こえました。男は悲鳴も上げず、ただ絶望で歪んだ顔で苦しみ、やがて事切れました。

その凄絶な光景に、ファジユルは気を失ってしまいました。

*

そこまで語り、ライルは口を閉じた。

それ以上何も言わないので、たまらずアティーヤは尋ねる。

「それで？ それで、その娘は一体何者なんだ？ そしてその宝玉は、バドル・アル・ドュジャーなのか？ 頼む、ライル。続きを聞かせてくれ」

アティーヤの言葉に、他の聞き手達もうんうんと頷いて同意する。聞き手は皆、ライルが語る妖しくも魅惑的な物語の虜になっていた。

アティーヤは気が付けば、ファジュルの心情に自らの心を重ねていた。同じ若い商人であつたからというのもあるが、なによりもライルの語りのためでもある。彼女の語る全てがアティーヤの胸に訴えた。

そして、蝋燭の明かりが届かない闇に、なにかが潜んでいるように思えた。子供の頃信じていた妖魔や魔人が、ライルの物語に惹き付けられてすぐ近くまできているような、そんな感覚だ。

しかしライルは首を横に振った。

「……今夜お話出来るのは、ここまでです。これ以上お話していると、明日の朝起きられません」

「だが……！」

バドル・アル・ドゥジャーの行方という最初の目的を抜きにしても、早く続きを聞きたかつた。

それでもライルは、首を横に振るばかりだ。

「……じゃあ約束してくれ。明日の夜も、必ずこの続きを語って聞かせてくれると。明日だけじゃなく、物語が終わりを迎えるまでずっとだ」

「はい。約束します。続きは明日の夜、絶対に語ります」

そう言ったライルの表情は、物語り師としての誇りに満ちていた。

第二夜 物語り師と宝石商

翌日少し遅く起床したアティーヤは、市へと繰り出した。それから日が高くなるまで、アティーヤは目まぐるしく動いた。

フェルカンドの次は、南の少数民族の集落を訪れる予定だ。その長はアティーヤの父と旧知の仲で、もうすぐその娘が結婚するらしい。その婚礼のための装飾品を売りに行くのだ。族長の娘のための宝石であるから、それに似合った宝石を目利きせねばならない。また、それ以外にも街や集落を回る予定だ。午前中、そのための品物をいくつか買い付けた。

しかし、宝石を目利きしている時でも、頭の片隅にあったのはあの少女と少女の語る物語だった。

こんなに夜が待ち遠しい気持ちになるのは初めてだった。

「……ライルはどうしているんだろうか」

買い付けは一区切りついたので、アティーヤは彼女の様子を見に一度隊商宿に戻った。

隊商が到着した時は賑わう宿も、今は静かなものだ。アティーヤは自分の部屋には立ち寄らず、直接元使用人部屋に向かった。

戸を叩いて声をかけると、部屋の中からライルが顔を覗かせた。

「……どうぞ」

彼女はアティーヤを部屋に招き入れた。その声は、昨日よりも明るく思える。

「体の調子はどうだ？」

「はい。大丈夫です」

普段の彼女は、語り部としての彼女とは別人のようだった。その言葉には、昨夜の語りのような、聞く者を圧倒する気迫はない。しかし顔つきは昨日よりずっと朗らかだ。

まるで萎びた花に水をやったときみたいだ、とアティーヤは思う。彼女は、物語り師は生きた証を刻みつけるために語るのだと言っ

た。しかし彼女を見ると、むしろ物語そのものが彼女に活力を与えているようだった。語ることを通して、亡き姉と向き合っているようにも見えた。

「昨日はあの後ぐっすり眠れたか？ 食欲はあるか？」

「……えっと」

ライルは言葉を濁して、視線を自分の横に少し移した。その先にあったのは昨日アティーヤが渡した胡桃の菓子の包み紙。中身はなかった。

「食べてくれたのか。……でも、一人で全部食べてしまったのか？ 結構たくさんあったように思うが」

「え、えっと、あの、」

ライルがそう言葉をよどませたので、アティーヤは慌てて付け足す。

「いや、別に気にしなくていい。というか、助けた時君を抱きかかえて思ったんだが、君は痩せているからもう少し食べたほうが……」
しかし、それは逆効果だった。

ライルの顔はみるみるうちに紅潮していった。

「あ……、う……」

わなわなと震えながら、ライルは口を開けたり閉じたりして言葉にならない声を漏らす。

「……どうかした」

のか、と続ける前に。

「出ていってください」

「え？」

「わたし、家族でもない男性を一人部屋に招きいれるような女じゃありません！」

そう言うときライルはアティーヤを部屋から追い出し、戸をぴしゃりと閉めてしまった。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！ 別にいきなり追い出すことはないだろう！ 何に怒ってるんだ？」

「怒ってなんてないです！」

ライルは怒りに満ちた声で言った。

「抱きかかえたとか何だとか……挙句のはてには体型のことまで！ わたし、男性にそんな無神経なこと言われたのって初めてです！」

女兒は年頃になると、家族以外の男とはほとんど接することもなくなくなるものだ。それを考えれば、ライルの反応も別に過剰ではないのかもしれない。しかし。

「抱き上げたのは君を助けるためだ。そんなふうになんて言わなくてもいいだろう」

「それはそうですが……わざわざ口に出していることは……アティヤさんこそ、そんなふうになんて言わなくてもいいんじゃないですか」

「……恥ずかしかったのか？」

「だから！　なんで、わざわざ言うんですか！」

どんと戸を叩いて、ライルは苦情を訴える。再び開いてくれる様子はない。

アティヤは、ははつと笑って戸にもたれかかった。

「……少しは心を開いてくれたかと思ったが、そう上手くはいかないらしい」

「それはアティヤさんも同じじゃないですか。アティヤさんもわたしに隠し事、してますよね？　……わたしのこと、子供だと思っ

っているんですか？　だから話してくれないんですか」

「……歳はいくつなんだ？」

「十六です」

小柄な体格のせいだろう、アティヤが思っていた年齢より年上だった。

アティヤは二十三歳なので、七歳差だ。

「子供、というよりは妹だな……」

「わたしのお義兄様はアティヤさんみたいな意地悪は言いませんでした」

「……そうか。俺では君の家族の代わりにはなれないらしい」

アティーヤは戸に体を預けるようにしながら、力なく言った。

アティーヤにも、家族はない。ライルの昨夜聞いた父の話と彼の口ぶりからそれを察した。

「……アティーヤさん。わたし」

彼女は戸の向こう側で、意を決したかのように続ける。

「わたし、バドル・アル・ドュジャーの物語を語ります。必ず、最後まで。何があっても。だからアティーヤさんも聞かせてください。アティーヤさんとその宝石のお話を。アティーヤさんがバドル・アル・ドュジャーを探すのには、昨日の夜話してくれたのよりももっと大きな理由がある……そうでしょう？」

言葉の尻は疑問の形になっていたが、彼女には迷いなど無かった。アティーヤは何も言っていないというのに、彼女の中ではそれはもう確信になっているらしい。ティーヤは直感する。もはや何を言うても否定できない、と。

「それを聞いてどうするんだ？」

「わたしもバドル・アル・ドュジャーにまつわるお話をもっと知りたいんです。アティーヤさんが魔石を求めると同じように」

姉の遺志を継ぎたい。ライルのその想いに、アティーヤが共感しないはずが無かった。彼もまた、父の遺志を継いで宝石商となったのだから。

「……分かった」

観念したアティーヤは廊下に座り込んだ。そして身を預けるようにして戸にもたれかかる。

やはりライルの部屋の扉は開かない。この戸が開くのはきっと自分が心を開いたときだ、とアティーヤは思った。そのときにライルもこの扉を開いてくれる、と。

薄い一枚の木の板が、今はとても分厚く感じる。

「お前のように上手くは語れないが……聞いてくれるか？」

戸の向こうで、ライルが頷くのが分かった。

「昨日も言った通り、俺の父親は宝石商だった。王都に店を構えていて、国王様のご子息に贖肩にされる宝石商だった」

「……それじゃあ、すぐく裕福な家で育ったんですね」

ライルは少し意外そうだった。一人で旅をするアティーヤのことを、豊かだと思わなかったのだろう。

「いいや、そうでもないよ。贖肩といっても、何人もいるお気に入り商人の一人というだけさ。だから何とかして王子様に気に入られようと、父はいつも必死だった。ちょうどその頃の国王様は、世界中の美術品や装飾品を収集することがご趣味だった。次期国王候補の王子は二人。一人はもちろん、父を贖肩にしていた王子だ。もう一人はその弟。二人とも自分こそ次の国王になろうと、父親の機嫌をとるのに必死だった。そしてそれぞれの王子を取り巻く商人達も、なんとか王様のおめがねにかなう品物を見つけようと必死だったよ。そんな折、父は見つけた　伝説の石を。それが　」

「バドル・アル・ドュジャー……」

ライルの声は震えていた。その名を胸に噛みしめ、アティーヤは続ける。

「その頃、俺はまだ幼かった。だから父がそれをどこで手に入れたかは分からない。でもその時のことはよく覚えてるよ。その日父は、夜が更けてから帰って来た。一つの宝石箱を抱えて。たまたま目を覚ました俺に、父は言った。『アティーヤ。この中に入っているのは強大な力を持つ伝説の魔石だ。愚か者が近づけば厄災が降りかかると言われている。迂闊に触ってはいけないよ。きつと良くないことがおこるから……』　俺は一度納得して、寢床についた。でもどうしても寝付けなかった。……伝説の宝石のことが気になつてしまったんだ。どうしても我慢できなくなった俺は、寢床を抜け出した。そしてその宝石箱に手をかけた　」

そこでアティーヤは言葉を区切った。

彼は今胸の内で宿敵と対峙していた。月の如く輝く、宿敵と。

「……そこにあつたのは？」

「今まで見たことないくらい素晴らしい宝石が、そこにあつたよ。拳ほどの大きさのあるそれは、月光を受けて煌いていた。……俺は今までないくらい胸が躍ったよ。素敵な秘密を独り占めしたようなそんな気持ちになった。その日はそのまま気持ちで眠りについた。

でも、俺が穏やかな気持ちで眠ったのはそれで最後だったよ」

「え……？」

「次の日の夜、父は死んだ。父も、母も、妹も。祖父母も。殺されたんだ」

ライルは思わず息を呑んだ。何かを言おうとしたようだったが、今は話を聞くべきだと思つたのだらう。何も言わずにアティーヤの言葉を待った。

「夜更けに闇のように黒い装束を身に纏った男達が家に押し入ってきたんだ。それで、家族を――」

「……もういいです」

耐え切れず、ライルはそう言つた。

「いいんです。アティーヤさんが辛いことは語らなくても。……分かりますから」

ライルには分かつたのだ。家族を失つたまさにその時のことの詳細を語るのは、アティーヤにとつていかに苦しいことであるか。アティーヤは苦しいなどとは一言も言わないし、そんな素振りも見せていないつもりだった。しかし言葉にせずとも、彼女はアティーヤの語調からすべてを読み取っていた。

「……悪いな」

アティーヤは少し情けなくなつた。昨日、物怖じ一つせずに物語を紡いだライルに対して、自分はどうかだらう。聞き手の少女に、気を遣わせてしまうなんて。

「うん。続けられるところから、続けて」

「……俺は寝台の下に隠れていて命をとりとめたが、すべてを失った。家族も。財産も。あの月の宝石も無くなっていた。なんとか親戚の家で世話になって命は繋ぐことは出来た。でもその日以来、俺が穏やかな気持ちで眠ったことは一度もなかったよ。大切なものを奪われた悲しみ。そして強い怒りに、俺の胸は爆発しそうだった。そして何より自分を憎んだ。あの日、父の言いつけを破ってあの石に触れたから。だから家族に災いが降りかかったんじゃないかって。そう何度も後悔した。成長して、俺は家族を襲ったのは弟王子のさしがねだったことを分かった。それを知った時には、その王子は国王になっていた。俺は確信した。彼は伝説の宝石の力で王になったんだ、と」

「じゃあ、バドル・アル・ドュジャーは今……！」
アティーヤは首を横に振った。

「成人した俺は、あらゆる手を使って、あの宝石や、王のことを調べた。憎しみは強い復讐の心になっていた。それだけが、俺が生きていくための道しるべだったんだ。だが、その王子 いや、王の手の内にも、その父の元にも伝説の宝石は無いらしいんだ。それで俺は、その石を使って復讐を成し遂げることを思いついた」

アティーヤは腰の剣に視線を落としながら、更に続ける。

「家族を殺したものを、自分の手で殺してやる……そう思って、剣の腕を磨いたこともあったよ。しかし俺は気が付いた。いくら強くなったところで、相手は遙か遠くの人。俺の刃なんて、いくらがんばっても届かないような人だ。それに俺は戦士じゃない。宝石商人の息子だ。敵討ちには剣の力じゃなくて、宝石を使う。バドル・アル・ドュジャーの力を」

アティーヤは誰よりも石の力を信じていた。理屈ではない。あの夜見たバドル・アル・ドュジャーの輝きは、アティーヤに有無を言わせずそれを悟らせた。

「俺は勝ちたいんだ。家族を奪った者に。月の輝石の強大な力に。そのためにはまず、バドル・アル・ドュジャーに辿りつかなくては

いけない。だから、ライル。お前に　　

そのときいきなり戸が開いた。戸に身を預けていたアティーヤは、そのまま倒れて頭を床に打った。

衝撃に思わず目を瞑る。次に目を開けるとそこにあったのは、こちらを見下ろすライルの顔。

「わたし、語ります。喉が噎れても、体が動かなくなっても……けつして語るのを止めません。物語を語り続けます。アティーヤさんのために。そしてわたしはわたしの物語を紡ぎだすために」

少女は優しい目でこちらを見ていた。

復讐に身をやつす彼を非難することなどせず、ただアティーヤの心に寄り添うかのように。アティーヤは起き上がるのも忘れて、彼女に見とれた。輝く黒い瞳に。物語を紡ぎだす小さな唇に。

彼女を見ていると不思議な気持ちが始まり、湧き上がってきた。しかし、彼はその気持ちをなんとか分らない。

そんな彼を包み込むように、ライルは穏やかな声で言った。

「だから、アティーヤさんも紡いでください。宝石商アティーヤの物語を　　」

アティーヤは長い悪夢から、醒めたような気持ちだった。

「ファジユルが目覚めたのは、もう日が高くなった頃でございました」

また日は沈み、昨日の物語の続きが始まった。

昨夜と同じように、彼女は物怖じ一つせず語り始める。しかし、昨日と違うことがあった。

それは物語の聞き手。アティーヤと女将達の他に、近所の女子供十人以上が宿屋の一室に集まっていた。砂漠のように娯楽のない場所では、噂話はうつつつけの楽しみだ。至上の語り部の噂はあつという間に広がったらしい。

周りが女子供ばかりなのでアティーヤは少し居心地が悪かったが、そう思ったのは最初だけだった。

「傍らには、あの娘が立っておりまして」

物語が始まれば、皆一様にそれに引き込まれていった。

*

イマルは微笑みながら立っていました。その微笑からは、目の前の娘が男の首筋に噛み付いたあの化け物だとは思えません。ファジユルは自分が見たのはうつつではなく、夢の中の出来事だと考えました。「きつと神の教えを背いて飲酒をした報いに違いない」ファジユルは心の中でそう言い、納得しました。

イマルはゆっくり体を休めるように言い、ファジユルは喜んでそれに従いました。太陽が昇りきり、また傾き始めるまで、イマルとともに日陰で寝そべって他愛もない会話を交わしたりしました。やがて、ファジユルの腹がまた減ってきたのに気がついて、イマルは食事の準備をすることにしました。

「わたしは食事の準備に取りかかりますが、あなた様はここで待っていてくださいね。勝手にどこかに行ってしまうてはいやですよ」
「もちろんですよ」

ファジユルは快くそう言ったものの、一人でいるとどうしても昨夜の夢のことが気になってしまいます。果たして自分が見たのは、夢か現実か？ 気になってじっとしていることもできません。ついにファジユルはイマルの言葉を無視して、昨夜の神殿を探すために屋敷を抜け出しました。人のいない街を、昨夜歩いた道を思い出しながらさ迷います。少し足が疲れてきた頃、ファジユルは昨日の神殿を見つけました。もしかしたら昨夜みたのは夢ではなかったのかもしれぬ、という嫌な予感がファジユルの頭を過ぎります。しかし湧き上がる好奇心を抑えきれず、薄暗い神殿の中へ歩を進めます。神殿の中はやはり細い一本道が続きました。それを抜けたその先に

あつたのは、あの大きな宝玉。そしてあのおぞましい異教徒の偶像でございます。

「嗚呼、なんてことだ！ 悪い夢であつたなら良かったのに」

日の明かりのため、神殿の内側の様子が詳しく見てとれました。壁や床が細密な装飾が施されております。しかし、それらは遠い昔に作られたようでございました。異教の神への信仰が、いかに古くから続いているかを示しているかのようです。ファジユルが周りを見回しておりますと、像の裏側に何か白いものがあるのに気付きました。恐る恐る近づいてみることにします。そこにあつたのは、なんと、骸骨！ 朽ち果てた亡骸が横たわっていたのです！ しかも屍は一体ではありません。いくつも骸骨が積み重ねられています。まさか！ 男が喰われたのも夢ではなかったというのか！」

ファジユルはやつと、自分が知っていけないことを知ってしまったことを理解しました。足は震え、鼓動が速くなります。一刻も早くこの街を去らねばならぬと思った、まさにその時でございます！ 「見つけてしまったのですね……」

ファジユルの背後に、物憂いげな顔のイマルが佇んでおりました。ファジユルの恐怖は、頂点に達します。

「まさか、あなたが異教の邪神を信じる人食い鬼だったなんて！」
「邪神？ あなた様がなぜそんなことをおっしゃるのか、わたしには分かりません。アクラブの神はわたし達に力を与えてくださったのです。我々は元々国を追われてさ迷う、流浪の民でした。しかしアクラブの神は我らをこの地に導きました。そしてその偉大な秘術は、わたし達に人が及ばざるほどの力を与えたのです。幾度日が昇り月が巡るうとも我らが肉体は老いることなく瑞々しいままでございます。アクラブの神は我々を死の恐怖から救ったのでございます。ご覧ください！ この高妙なる光を放つ宝玉を！ これはアクラブの神のはらわたより出てきた石であると伝えられております。そしてこの対をなす像は、神の御姿をかたどったものなのでございます！」

異教の神に心酔しきっているイマルは、己の所業　もちろん、人食いや偶像崇拜のことでございます　を恥じる様子すらありません。

「異教の神の秘術の代償として、人食いなどという悪行に手を染めているっていうのか！」

「あなた様なら、我々のことを分かってくださると思っていたのですが」

イマルが心から残念そうにそう言ったので、ファジユルは叫びました。

「あなたは自分がどれほど罪深いか分かっていないんだ！」
すると彼女はいつそう表情を曇らせます。

「あなたもそうおっしゃるのね。かつてこの街を訪ねた青年もまったく同じことを言いました」

ファジユルは恐怖に任せて、叫びました。

「その青年を、あなたは喰ってしまったのか！　そしてわたくしも喰ってしまったつもりなのだ！」

「それはどちらも違いますわ。わたしがあなたを食べるなんてそんなことできるはずがないのです。わたしはその青年と一夜を過ごし、子を孕みました。その子は青年に育てられました。再び街へやってきたのです。その子とは、他でもないあなた。どうしてあなたを喰うことなどできましょう。たった一人の我が子なのですから！」

青年はその言葉が意味するところを、すぐに理解することはできませんでした。ですがしばらく経って、自分が何者であるか、やつと分かり始めました。そして初めてイマルと出会ったとき、彼女が言った言葉の意味も。

「あなたは人の子ですか。それとも妖魔の類でしょうか」

ファジユルの問いに彼女は、「あなたはどのようなのですか」と問い返しました。ファジユルは迷うことなく、自らは人の子であると言いました。それは誤りだったのです。ファジユルの正体は、化け物と人から産まれた混血児。純粋な人間ではなかったのです。その

ことに気がついたファジユルは怒りと恥辱に震えました。それも当然です。自分がその気を持っていた人は化け物で、しかも母親だったのですから！

何も言わずにこちらを見るイマルを残し、ファジユルは神殿を飛び出しました

*

そこでライルは語るのを止めた。今日の分の物語はここまでらしい。

物語の展開に、聞く者は皆、息をするのも忘れそうになっていた。アティーヤも例外ではない。物語の登場人物であるファジユルの身を本気で案じていた。人と化け物の子である彼は、これからどんな道を歩むのか

物語の終わりを惜しむ声にもライルは、「また明日」とだけ答えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5791x/>

月と星屑のライル

2011年11月12日03時25分発行